The Japan Lung Cancer Society

A-30 肺癌に併発する感染症

国立東京第二病院　呼吸器科
熊谷謙二、佐藤武材、猿田栄助、柴崎慎一

研究の目的。気管支癌がありその末梢部位に感染をおこして肺化膿症の状態となつている場合がある。ヒンショウなどは気管支性肺膿瘍の25%は肺癌によるものであるとさえ強調しているがこの実態を知るために次の調査を行つた。

研究の方法とその成績。昭和39年5月から49年4月までおよそ10年間に当院呼吸器科を退院した肺癌患者は423例ありそのうち原発性のもの344例（男性251例、女性93例）また転移性のもの79例（男性39例、女性40例）である。そのうち剖検したもの205例、剖検できなかつたもの118例、また退院後死亡したもの78例、調査時点において生存しているもの20例である。以上の423例について入院後次のような条件のものを肺感染と考えた。即ち胸膜炎の併発していないもので38°c以上の発熱が5日以上続き白血球数の1万以上のものである。全肺癌例を検討して81例に感染があつたと考えた。原発性のものは78例でその発生頻度は22.7%、転移性のものは3例でその発生頻度は0.7%で全肺癌からの頻度は19%となる。次に原発性肺癌78例をTNM分類からみるとT_1 3例（3.8%）、T_2 47例（58%）、T_3 31例（38.2%）である。組織診からみると扁平上皮癌47例（60%）と最も多く、次に腺癌は21例（26.3%）、未分化癌3例（4.8%）、未定7例（8.9%）となつている。次に気管支造影像からみた気管支の状態は閉塞および狭窄の著明なものは56例ありその内訳は右上葉支16例、右B_6 3例、右中葉支4例、右下葉支3例、左B_{1+2}、B_3 14例、左B_6 3例、左下葉支10例、左主気管支3例となつている。次に転移性肺癌の3例で肺に感染を認めた1例は胆道癌を原発とし他の2例は子宮癌が原発であり3例とも「ツ」反応は陰性で1例は帯状疱疹を合併していた。即ち免疫状態の低下を意味するものと考えられる。なお当院に入院した肺癌167例、肺炎124例、肺結核548例についてPPDによる「ツ」反応の成績を検討すると肺癌では肺炎と同じく「ツ」反応が陰性および疑陽性が多く見られ肺結核では40才以上の肺結核274例についてみても陰性や疑陽性が少く肺癌と異るパターンを示しているのは注目すべきことである。

結論。肺癌は肺の感染を来すことが多くその頻度は入院当初では22.4%、転移性では0.7%であつた。原発性癌では扁平上皮癌が60%と多くこれは気管支の狭窄、閉塞をおこすことが多いためと考えられる。また肺癌に肺感染をおこすことの多い理由の一つに癌患者の免疫の低下もあげられよう。

A-31 肺癌に併発する感染症

長崎大学医学部内科学第二教室
○原耕平、中野正心、斉藤厚、那須勝、堤恒夫、広田正毅、奥野一裕、籠手田恒敏、中塚重和、雨森博政、吉村康、

喀痰の厳密な細菌学的検査が可能となつた昭和43年より、昭和48年までの原発性肺癌で、剖検、手術及び生検などによつて、組織診の明らかな151症例を対象とし、その感染の併発について検討を加えた。組織型は、扁平上皮癌56例、腺癌70例、未分化癌大細胞型13例、小細胞型12例である。

胸部X線上、初診時に明らかに二次性の炎症像が認められたものは23例（15%）で、その内訳は扁平上皮癌12例、腺癌7例、未分化癌大細胞型2例、小細胞型2例であつた。各組織型における炎症の併発頻度は、扁平上皮癌21%、腺癌10%、未分化癌大細胞型15%、小細胞型16%で、症例の少ない未分化癌は別としても、扁平上皮癌は腺癌に比べ感染像の併発頻度が高かつた。

初診時の喀痰細菌検査では、昭和43、44、45年度では、肺炎双球菌をはじめとするグラム陽性球菌が比較的多く検出されたのに対し、46年度以降ではKlebsiella, Citobacter等のグラム陰性桿菌が多く検出された。このほか結核菌が検出されたものが2例あつた。組織型と検出菌との間には一定の関連性は見い出されなかつたが、更に、検出菌の推移と肺の感染による病像との関連についても検討を加える。

死亡時の細菌検査では、死亡前一週間以内の喀痰ではPseudomonas, Klebsiella aerogenas, E·coli等のグラム陰性桿菌が多種類に亘つて検出されることが多かつた。また、我々は剖検時に肺穿刺吸引法による菌検索を行つているが、剖検肺からの菌検索でも、上記三種類の菌が多かつた。従つて、死亡前の状態では、これらの菌が大いに感染に関与していることを考えさせた。しかし、死亡前の胸部X線像には、菌の種類による特徴的なパターンはみられなかつた。

肺癌におけるこれらの末期像を、血液疾患での末期肺感染症と比較してみたところ、検出細菌の種類には特に差異を認めなかつたが、Pneumocystis carinii, Cytomegalovirus等による肺病変は、血液疾患のみに認められた。Cryptococcus, Candida, Aspergillus等の真菌による肺の感染像は、血液疾患では約20%にみられたが、肺癌では剖検例79例中5例、6%、Mucor 1例、Cryptococcus 1例、Candida 1例、Aspergillus + Candida 1例、同定不能1例と少なかつた。

なお、これらの検索成績については49年度の一部についても追加すると共に、治療（放射線、抗癌剤、ステロイド）に伴う、喀痰内細菌の変動についても検討を加え、一部の症例については免疫学的考察を行う予定である。

NII-Electronic Library Service